

“さくさく”  
よんごうめ  
たのしんでね!



サイアフ。  
ラウンジ  
ヒストリー  
2016 → 2017

vol. 04

発展期  
“活動拠点として”



【前回までのヒストリー】

札幌国際芸術祭（以下 SIAF / サイアフ）の活動拠点として、「SIAF ラウンジ」と「SIAF プロジェクトルーム」が、札幌市資料館に設置されることとなった。そして SIAF の認知度を高め、より札幌らしい芸術祭を追究し、それを担う人材を育成することを目的に、両者を基盤とする「SIAF ラボ」の活動が始まった。

札幌市資料館では「SIAF 編集部」が立ち上げられ、ボランティアの方々による自主的な情報発信活動が行われていた。これは SIAF 本体の活動とは別に、市民目線の芸術祭普及を、市民自らで考えていきたいというボランティアメンバーの思いから始まったものだ。そして SIAF2014 の終了後、「SIAF ラボ」の活動の中で「SAPPRO STUDY」という、札幌の文化的資源や歴史、人々の営みなどをもう一度捉え直すという取り組みが始まり、その流れで「SIAF 編集部」の背景があいまって、「SIAF ラボ編集部」が立ち上げられることとなった。

2015-2017 年の SIAF ラウンジは、「SIAF ラボ」の活動と切っても切り離せないと言っても良いだろう。初期の SIAF ラボは、現在と同じようなメディアアートのコンテンツ開発もさることながら、芸術祭と市民をつなぐ啓発活動を重点的に兼ねていた。芸術祭を札幌でやることの意義の再検討、また、よりオリジナルな芸術祭を作っていくために、広く市民参加を促す取り組みが必要とされていたからである。SIAF2014 に遡ると、当時札幌市資料館では「SIAF 編集部」が立ち上げられ、ボランティアの方々による自主的な情報発信活動が行われていた。これは SIAF 本体の活動とは別に、市民目線の芸術祭普及を、市民自らで考えていきたいというボランティアメンバーの思いから始まったものだ。そして SIAF2014 の終了後、「SIAF ラボ」の活動の中で「SAPPRO STUDY」という、札幌の文化的資源や歴史、人々の営みなどをもう一度捉え直すという取り組みが始まり、その流れで「SIAF 編集部」の背景があいまって、「SIAF ラボ編集部」が立ち上げられることとなった。

SIAF ラボ編集部では、札幌の面白い要素のメディア化、つまり、札幌をリサーチし、それをどうメディアとして捉え、どう発信していくかということを参加者と共に検討していった。参加メンバーは、SIAF2014 のボランティアの方々を中心としながらも、次第に、月 1 回の編集会議や年 4 回開催の「ラウンジトーク」を通じて、美術が好きな人のみならず、札幌の歴史やメディア開発などにも関心のある幅広い層の人々が、老若男女、職業もさまざまに顔を見せるようになった。

特に「ツララ」をメディアとして捉えるようになるかを多角的に検証した「BENTICLE PROJECT - TULALA（愛称ツララボ）」は、その成果発表として「さっぽろ垂氷まつり」という札幌市資料館を舞台とした継続的なイベントへと繋がっていった。ツララの持つ面白さを再編集した垂氷まつりは、ツララの性質そのものを掘り下げることから、次第に「建築とツララ」「都市とツララ」と、文字通りツララという「メディア」を通じ札幌について考える取り組みへと発展していったのである。

こうして、札幌市資料館及び SIAF ラウンジ、SIAF プロジェクトルームは、SIAF ラボの活動を軸に、専門性を持った人々と市民との協働の場として育まれていった。そして同時に、SIAF2014 の時の、唐突な資料館の使い方は異なり（失礼！）、札幌市資料館は SIAF に関わるさまざまな人々にとって親しみのある場所として、次第に認知されていくようになった。札幌市資料館を、芸術祭の入り口としての活動拠点にしたいという関係者たちの構想が、ついに実現を見たのである。また、芸術祭という大きな装置をきっかけに、札幌市資料館を、芸術文化関係者をつなぐアートセンターのようなものにしていきたいという、われわれマネージャー陣の密かな構想も、だんだん形になり始めていたといっても良いだろう。そしてこれらの積み重ねは、SIAF2017 において札幌市資料館を「市民とアーティストが出会う場所にしたい」という、大友良英ディレクターの考えへと結実し、やがて展開していくことになるのである。

おいしさも、環境のことも… みんなで考えてつくっています。

[チョコバー]

SIAF ラウンジのチョコバーは、たっぷりのアーモンドとレーズン、ざくっときざんだスコーン入りの具だくさんスイーツ。SIAF ラウンジを活動拠点にしている「SIAF ラボ」のメンバーたちといっしょに考えたレシピがもとになっています。(SIAF ラボについては sakusaku 03 の記事をごらんください) 作成のきっかけは、おなじくメニューにある手づくりスコーン。トレーにならなできたてのスコーンをみるとわかるのですが、形がちょっぴりふぞろいで、販売に向かないものがいくつかできてしまうことも。それをかんたんに廃棄するのではなく、おいしくよみがえらせたい! そんなふうにもみんな考えています。

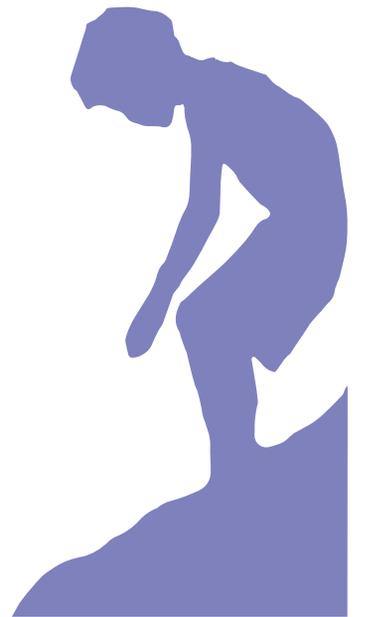


国分拓著「ヤノマミ」(NHK出版)

人との関わりが希薄になった今日、隣に住む人の趣味や性格どころか、顔すら知らないという人も多いのではないのでしょうか。他人と友人の区別が明確になったこの時代にカフェが果たす機能はそ

の中間としてあり続けることではないかと思えます。コロナ禍で会話が難しい状況ですので、SIAF ラウンジスタッフおすすめの書籍をご紹介します、皆様と関わるきっかけになればと思います。

今回ご紹介する書籍は、「ヤノマミ」です。ヤノマミとは、ブラジルとベネズエラの国境にある深い森の中で1万年にわたり独自の文化や風習を守り続ける先住民族。本書は著者らの150日間に及ぶ同居生活の体験が綴られたルポルタージュです。ヤノマミの暮らしは文明圏に住む我々からすると常軌を逸したもので、衣食住や娯楽の違いだけでなく、彼らの持つ精神世界の恐ろしさに驚かされます。我々が社会の中で巧妙に隠してきた感情を、彼らは剥き出しのまま人や自然と対峙しており、その中で生まれた文化は人が本来持っていた暴力性や無垢さが強く反映されたものでした。それを目の当たりにした著者は次第に心の中にある「何か」を突き動かされ、心身が壊れていきます。誰もがその理由を遠い国のことと片付けることはできない。そんな結末と知らない自分の一面を教えてくれる一冊です。



第4回 テーマ → あいだのほん 間 ←

植物図鑑 02

【タチアオイさん】

ある日突然、管理人さんによって連れてこられたタチアオイ。夏になるとピンク色のあざやかな花を咲かせる・・・らしいのですが、スタッフ一同、この子のお花を見たことがありません。果たして本当にタチアオイなのか、謎は深まるばかりです。そんなミステリアスで謎の多い子ですがいつも元気に皆様のご来室をお待ちしております。



「ラウンジのほんだな」第4弾として取り上げるのは、「間(あいだ)」にまつわる本たちです。お気づきの方もいるかもしれませんが、SIAF ラウンジの書籍には「〇〇と□□の間(あいだ)」というタイトルの本が複数あります。今回はその中から、2回目の開催となった札幌国際芸術祭(SIAF2017)につながるの深い、2人の著者による本をご紹介します。取り上げるのは、大友良英著「音楽と美術のあいだ」と、佐藤直樹著「無くならない アートとデザインの間」。間(あいだ)にまつわる本とはいえ、この2冊はともに、間(あいだ)にあるものはズバリこれだ!と切り切っている訳ではありません。音楽と美術、アートとデザイン、それぞれ2つの分野をまたがり活動してきた著者たちが捉えた「間(あいだ)」とはどんなものか、さまざまな対談者とのやりとりを通じて見えてくるのが本書たちの特徴です。文面を通じて著者の人柄が見えてくることはもちろん、そうした対談者たちの考える「間(あいだ)」も窺い知ることができます。また、SIAF2017に活かされたヒントが、そこかしこに散りばめられている本たちとも言えるかもしれません。

SIAF ラウンジとわたし。



SIAF ラウンジの立ち上げから、マネージャーとして2年弱関わっていました。芸術祭や展覧会でコーディネーターとして仕事をしてきた自分が、毎日(当時の自分としては)早起きして、毎日同じ場所で、毎日お客さんにコーヒーを淹れることになり、私(そしてラウンジも)どこへ向かっているのだろう・・・と、ふと思うこともありました。東京で1児の母になり、もっと「毎日」を繰り返しているいま思うのは、「毎日」を続けることのすごさです。芸術祭というお祭りがあってもなくても、今日も地味だけどしっかり、ゆるっと、ラウンジは続いている!どこに行き着くかはわからないけれど、とにかく続けることが大切なのはと、日々成長する子どもを見ていて思ったりします。

アート・コーディネーター/元 SIAF ラウンジ・マネージャー 齋藤ふみ